



2000年12月16日(土) [公開セッション]	
13:00	<p><b>開会挨拶</b></p> <p>主催者挨拶 環境庁長官 川口 順子 後援者挨拶 神奈川県知事 岡崎 洋</p>
13:30	<p><b>特別講演</b></p> <p>内分泌攪乱の試験法：「体内小宇宙：インナースペース」より良く理解するために ティオ コルボーン (WWF (世界自然保護基金) 科学顧問)</p>
14:30	<p><b>パート1 取組の現状</b></p> <p>自民党の化学物質問題への取組と今後の課題 馳 浩 (衆議院議員)</p> <p>公明党の環境ホルモン(内分泌攪乱化学物質)問題への取り組みについて(3) 加藤 修一 (参議院議員)</p> <p>米国における現在の内分泌攪乱化学物質戦略 ゲーリー E. ティム (米国 環境保護庁 (EPA))</p> <p>EUの内分泌攪乱化学物質問題に対する取組について ビルジット ファン トンゲレン (EU 欧州委員会)</p> <p>韓国における内分泌攪乱化学物質関連の政府政策 クム スソク (韓国 環境庁)</p> <p>「環境庁における内分泌攪乱化学物質問題への対応について」 上田 博三 (環境庁 環境保健部 環境安全課長)</p>
16:00	<p><b>パート2 パネルディスカッション</b></p> <p>『内分泌攪乱化学物質どこまでわかってきたか』</p> <p><b>総括</b> 高杉 暹 (横浜市教育委員会委員長)</p> <p><b>内分泌攪乱物質による野生動物の汚染と影響</b> 田辺 信介 (愛媛大学 沿岸環境科学研究センター (CMES))</p> <p><b>環境内の信号：内分泌攪乱現象を理解する新しい道</b> ジョン A. マクラクラン (米国 チューレン大学/ザビエル大学)</p> <p><b>環境ホルモンと生殖医療</b> 堤 治 (東京大学)</p> <p><b>産業界の見解：「我々は内分泌攪乱化学物質をどのくらいまで理解したのか？」</b> アンジェリナ ジョイ セリオ ドウガン (米国 穀物保護協会)</p> <p><b>「環境ホルモン物質」によるリスクを考える</b> 関沢 純 (国立医薬品食品衛生研究所 化学物質情報部)</p> <p><b>ディスカッション</b></p> <p>座長：高杉 暹 (横浜市教育委員会委員長)</p> <p>パネリスト：ティオ コルボーン (WWF (世界自然保護基金) 科学顧問) 田辺 信介 (愛媛大学 沿岸環境科学研究センター (CMES)) ジョン A. マクラクラン (米国 チューレン大学/ザビエル大学) 堤 治 (東京大学) アンジェリナ ジョイ セリオ ドウガン (米国 穀物保護協会) 関沢 純 (国立医薬品食品衛生研究所 化学物質情報部)</p>

## 2000年12月17日(日)

9 : 30	<p><b>セッション1 野生生物への影響</b></p> <p>座 長：井口 泰泉（岡崎国立共同研究機構 統合バイオサイエンスセンター） ルイス J. ジレット Jr.（米国 フロリダ大学）</p> <p><b>内分泌攪乱汚染物質：野生生物から学ぶ</b> ルイス J. ジレット Jr.（米国 フロリダ大学）</p> <p><b>貝類における内分泌攪乱：韓国と日本における有機スズ汚染との関連で見たイボニシ、パイ及びマダカアワビに関するケーススタディ</b> ヒョン セオ チョ（韓国 国立麗水大学校）</p> <p><b>沢ガニにおける雄雌同体</b> 有菌 幸司（熊本県立大学）</p> <p><b>英国河川における野生魚類の性攪乱 その意味するものは何か？</b> スーサン ジョブリング（英国 ブルネル大学）</p> <p><b>カエルおよび分子ツールボックスを用いた甲状腺ホルモン攪乱作用の検出</b> カレン クリステアース ヘルピング（カナダ ヴィクトリア大学）</p> <p><b>化学および生物学を使用した環境内内分泌攪乱化学物質評価</b> ジョン P. ギージー（米国 ミシガン州立大学）</p> <p><b>内分泌攪乱化学物質と野生生物に関する現在の知見について</b> ピーター マティセン（英国 CEFAS（漁業水産養殖学センター））</p> <p><b>質疑応答</b></p>
12 : 00	昼 食
13 : 30	<p><b>セッション2 健康影響</b></p> <p>座 長：紫芝 良昌（虎ノ門病院）</p> <p><b>内分泌攪乱化学物質の疫学データ：米国ノースカロライナ州とメキシコでの調査</b> ウォルター J. ローガン（米国 国立環境保健科学研究所（NIEHS））</p> <p><b>ポリ塩化ビフェニル類（PCB類）とダイオキシン類の環境曝露 授乳が小児の長期にわたる脳発達に与える影響</b> <b>オランダのPCB / ダイオキシン縦断的調査<sup>1234</sup>の総説</b> エルンスト ルドルフ ベルスマ（オランダ グロニンゲン大学病院）</p> <p><b>PCBと他の有機塩素系物質に曝露した集団における甲状腺の状態、 特定の自己抗体、およびバイオマーカーの発現頻度</b> パベル ランゲル（スロバキア 科学アカデミー）</p> <p><b>ポリ塩化ビフェニルおよびジベンゾダイオキシンに曝露したYucheng患者における 内分泌攪乱を示す証拠</b> ユエリャン レオン グオ（台湾 国立成功大学病院）</p> <p><b>ダイオキシンとヒトの健康：イタリア「セベソ」20年間のデータ</b> パオロ モカレッリ（イタリア ミラノ大学ビッコカ校）</p>
16 : 00	休 憩



2000年12月17日(日)

16:30

### セッション3 試験法

座長：松尾 昌季 (住友化学工業株式会社)  
トーマス H. ハッチンソン (英国 アストラゼネカ社 ブリクスハム環境研究所)

#### 内分泌攪乱化学物質の環境毒性学試験法と生態系リスク評価

トーマス H. ハッチンソン (英国 アストラゼネカ社 ブリクスハム環境研究所)

#### 内分泌攪乱化学物質の有害性評価に対するメダカ繁殖試験とフルライフサイクル試験の比較

横田 弘文 (財団法人 化学物質評価研究機構)

#### 子宮肥大試験を中心としたエストロゲン様化学物質のスクリーニング

菅野 純 (国立医薬品食品衛生研究所)

#### アンドロゲン活性物質に対するスクリーニング戦略

ポール マッシュー デイビッド フォスター (米国 化学工業毒性学研究所 (CIIT))

#### 内分泌活性化学物質の第2段階試験：現行の多世代試験の方法は適切か？

ポール マッシュー デイビッド フォスター (米国 化学工業毒性学研究所 (CIIT))

## 2000年12月18日(月)

9:30

### セッション4 作用メカニズム

座長：長濱 嘉孝 (岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所)  
名和田 新 (九州大学大学院医学研究院)

#### 内分泌かく乱物質の魚類の性分化に及ぼす作用機構

中村 将 (琉球大学 熱帯生物圏研究センター)

#### 生殖腺の性分化を支える転写因子

諸橋憲一郎 (岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所)

#### ステロイド生成とStARタンパク質に対する内分泌攪乱物質の影響

ダグラス マイケル ストック (米国 テキサス工科大学保健科学センター)

#### 転写因子・共役因子と内分泌攪乱化学物質

名和田 新 (九州大学大学院医学研究院)

#### 内分泌攪乱物質の作用と毒性：エストロゲン受容体遺伝子ノックアウトマウスを用いた研究

ケネス S. コラック (米国 国立環境保健科学研究所 (NIEHS))

12:00

昼 食

13:30

### セッション5 低用量問題

座長：井上 達 (国立医薬品食品衛生研究所 安全生物試験研究センター)  
ロバート J. カブロック (米国 環境保護庁 (EPA))

#### 内分泌攪乱反応における低用量問題について

ロバート J. カブロック (米国 環境保護庁 (EPA))

#### NTP/NIEHSの内分泌攪乱化学物質低用量作用に関する専門家再検討の概要

ロナルド L. メルニック (米国 国立環境保健科学研究所 (NIEHS))

2000年12月18日(月)

**CD<sup>R</sup> (Sprague-Dawley) ラットにおけるビスフェノールA (BPA) の  
混餌投与による3世代生殖毒性試験**ロシェル W. テイル (米国 リサーチトライアングルインスティテュート 生命科学・  
毒性学センター)**思春期前のラットにおける生殖機能の発達に対するノニルフェノールの*in vivo*での影響：  
用量反応に関する考察**

ピン C. リー (米国 ウィスコンシン医科大学)

**指定コメント：**

遠山 千春 (国立環境研究所環境健康部)

ジェームス C. ラム IV (米国 BBLサイエンス社)

**ヒト曝露レベルのビスフェノールAにおけるマウス発生の変異**

フレデリック S. ヴォンサール (米国 ミズーリ大学 コロンビア校)

**ビスフェノールA のラットにおける2世代繁殖試験**

江馬 眞 (国立医薬品食品衛生研究所 大阪支所)

菅野 純 (国立医薬品食品衛生研究所 安全生物試験研究センター)

**指定コメント：**

堤 治 (東京大学)

ジェームス P. カリヤ (米国 環境保護庁 (EPA))

16:20

**セッション6 リスク管理**

座 長：鈴木 継美 (東京大学 名誉教授、日本内分泌攪乱化学物質学会長)

**循環型社会形成と残留性化学物質のコントロール**

酒井 伸一 (京都大学環境保全センター)

**内分泌攪乱化学物質に対する英国政府の取組み**

キャスリーン キャメロン (英国 環境省 (DETR))

**米国における内分泌攪乱化学物質危険性評価の実際**

ゲーリー E. ティム (米国 環境保護庁 (EPA))

**「環境ホルモン戦略計画SPEED'98」**

金井 雅利 (環境庁 環境保健部 環境リスク評価室長)

18:00

**閉会挨拶**

環境庁 環境保健部長 西尾 哲茂